

見直すという事はやっていたいと思った。  
じゅ業でやったからでなく自分かもしきよう  
みもって知って考えていきたいです。」5  
年女子

話し掛け得る現実是在ると思う。「岐路」  
は途方に暮れる場所ではないと思う。

(さとう・いつこ)山の空襲を語りつく集い実行  
委員)

## 過渡期のための共同作業

——「山の空襲」80周年追悼

朗読と音楽の集い

山本唯人

今年の7月13日、港区青南小学校体育  
館で、「山の空襲」80周年追悼朗読と  
音楽の集い(以下、集い)が開催された。  
集いは2016年から始まったもので、  
2020年からコロナ流行のため中断した  
が、昨年から復活し、今年で6回目を迎え  
た。アジア太平洋戦争の体験を伝える活動  
は、いま、過渡期を迎えている。戦争体験  
を持つ世代が減り、その世代の方たちから  
「直接、お話を聞く」という受け継ぎの方  
法が難しくなった。そうしたなか、今年の  
集いでは、この「過渡期」を表すような二

つの変化があった。

第一に、従来から集いを主催してきた実  
行委員会と港区との共催が実現したことだ  
ある。第一回の集いから実行委員会は、『表  
参道が燃えた日——山の手大空襲の体験  
記』正・続を編集・刊行した『表参道が燃  
えた日』編集委員会、地元の穂田キャット  
ストリート商店会、和・ピースリングの3  
団体で構成されてきた。昨年11月、港区よ  
り、表参道交差点・記念碑前での献花とこ  
の集いの開催について、連携の打診があっ  
た。その後、実行委員会と港区の協議の結  
果、二つの行事を両者の「共催」によって  
行なうことになり、広報や会場の確保、当  
日スタッフなどについて、港区の分担・協  
力を得て運営できた。表参道周辺で港区と  
並ぶ被災があった渋谷区とどう連携する  
か、そもそも、「山の空襲」とはどの範  
囲の空襲を指すかなど繊細なテーマを抱え  
ながらも、集いという営みを継続する上で、  
注目すべき変化の一つと言えるだろう。

第二に、「体験者が話し、非体験者が聞く」  
という従来のスタイルが、変わってきたこ  
とである。集いは毎年、地元で学ぶ学校生  
徒による体験記の朗読と、体験者のお話と  
いう二つのパートを軸にしていたが、今年  
は、実行委員・佐藤いつ子さんの台本によ  
り、ピアニスト・佐藤麻理さん、ビオラ奏

者・飯頭さんの音楽と子どもたちの朗読が  
交互に進行し、その節目で体験者が話すこ  
うなスタイルになった。前奏の音楽や朗読  
で文脈が示されれば、その分、「聞きやす  
く」はなるかもしれない。しかし、空襲体  
験が「音楽劇の一部」のように聞き流され  
てしまうのは本意ではないだろう。少し不  
安に思いながら本番を迎えたが、いざ聞い  
てみると、意外なほどにマッチして、聞き  
ごたえがあった。台本と音楽と朗読と体験  
者のお話と——体験した者と体験者から学  
んで伝えようとする者たちとの、絶妙な共  
同作業によって、この「語りつぐ」営みを

## 「山の空襲」80周年追悼 朗読と音楽の集い

日時 2023年7月13日(日)

開場 12:30 開会 13:00 閉会 15:00

場所 港区立青南小学校 体育館

主催 山の空襲を語りつく集い実行委員会 港区



アジア太平洋戦争中、港区を含む山の手は空襲  
の被害を受けた。中でも1945年3月13日の空襲は  
の被害に及んだ。山の手は、山の手大空襲と呼ばれ  
てきた。この空襲は、山の手大空襲と呼ばれてきた。  
この空襲は、山の手大空襲と呼ばれてきた。

2020年、港区立青南小学校の児童が「山の空襲」を  
学び、その体験を語りつぐ集い「山の空襲」を開催した。  
この集いは、山の手大空襲の体験を伝えるための活動  
の一環として行われた。

2023年、山の空襲を語りつく集い「山の空襲」を開催し、  
山の手大空襲の体験を伝えるための活動の一環として  
行われた。



「表参道が燃えた日」  
山の手大空襲の体験を伝えるための活動の一環として  
行われた。

2020年、港区立青南小学校の児童が「山の空襲」を  
学び、その体験を語りつぐ集い「山の空襲」を開催した。  
この集いは、山の手大空襲の体験を伝えるための活動  
の一環として行われた。

2023年、山の空襲を語りつく集い「山の空襲」を開催し、  
山の手大空襲の体験を伝えるための活動の一環として  
行われた。

成り立たせることができたと思った。

すでに過渡期を歩み始めたわたしたちは、これから、もっと多くの共同と試行錯誤を重ねなければならぬだろう。いまという時代の風景が垣間見えた、今年の集いになったと思う。

(やまもと・ただひと／山の手空襲を語りつく集い実行委員)

## 山の手空襲

——聞くことの大切さ

岡本 和子

私は長くこの青山の地に住んでいます。父も祖父も曾祖父も同じ青山に住んでいました。物心ついた頃の青山は穏やかな街でした。今の青山や原宿の様に華やかな街では無く、お店はユニオンチャーチやオリエンタルバザー、キディランドが有った位です。

家の庭には柿の木が有り、多くの花々も咲いて、縁の下からグニャッとしたガラス瓶を見付けるまでは悲惨な戦争のことを知ることも無く過ごして来ました。グニャリとした空き瓶を見た時、両親から聞いた戦争の話とガラス瓶が繋がりました。

ガラス瓶がどの位の温度でグニャリとな

るのか調べた所、1300～1600℃で瓶は熔けるとの事でした。5月25日の空襲では沢山の焼夷弾が落とされ、辺りは1000℃以上の高温になっていたことと思います。家族で戦争の被害にあったのは、父方の祖父と3人の妹達でした。一番下の妹は逃げている途中で仏壇に位牌を置いてきたことに気付き、急いで家に戻りそれを抱えて直ぐに父親達の後を追ったようですが、その姿はどこにも無かったそうです。叔母は側にいた女の人と防火用水の水をかけあい、命が助かったそうです。

他の場所に居て助かった私の父は、家族の遺体を捜して歩き回ったそうですが、どの遺体も真つ黒焦げで誰だか分からない状態だったようです。何年か経ってその辺りを歩いた時、穴は埋められ、何事も無かったかのように家が建ち並んでいたそうです。

大人になってこの辺りの悲惨な戦争の話を聞くたび、そこに居た人々の恐怖や無念の思いが、自分のことのように感じられるようになりました。会ったことの無い祖父や叔母達の逃げ惑う姿が浮かび、遣り切れない気持ちになります。

祖父は若い頃、海軍の軍人でした。山の手大空襲の業火の中で、祖父は何を思っただろうかと考えます。地獄のような猛火の中では、そのようなことを考える余裕など

無かったかも知れませんが……。戦争が無かったら祖父や叔母達は生きていて私と会い、どう思いどんな事を言ってくれただろうか考えることが有ります。

戦争が終わることの無いこの世界を見ていると、心から平和の尊さ大切さを感じます。誰にも未来が有り生きる権利が有ります。思い半ば志半ばで亡くなった人々。戦争はその全てを奪い取ってしまうのです。

私の名前は和子と言います。子供の頃「何故私の名前は和子と言うのか」と父に問うたことが有ります。父は「戦争が終わわり、平和の世の中に生まれた子だから」と答えてくれました。自分の名前に対する意識が変わりました。平和の子で有る私は平和を繋げる人で有りたいと願っています。

皆が不幸になる戦争は絶対にやってはいけないものです。

終戦から80年経った今、ネットが普及し多くの若い人達はその情報を丸呑みし、他国の人々を攻撃するような言葉を発しているのを聞くたび、私はどう行動したら良いのか悩みます。私は戦争を体験してませんが、体験した人から直に聞いた者として、この悲惨な戦争の話を若い人達にしっかりと伝えて行きたいと思うのです。

(おかもと・かずこ／山の手空襲を語りつく集い実行委員)